

# 道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



二階へあがってくれという。ただならない気配に訳を質すと、彼女はただ首をふって、社長が待っていますから早く行ってあげてくださいと目は階段を指した。

応接室のドアをノックする。

どうぞ、と倉田の低くこもった声がした。

「おい、どうした」

倉田はソファにうずくまっていた。

「ああ」

倉田は目をあげ、ねぐらを暴かれた穴熊のようにぶるつと身体をふるわせた。

「何があったんだ」

万作はソファに腰を落ち着ける。倉田は胸で大きく息をついで万作をじろつとみた。

「静江が睡眠薬をのんだ」

「睡眠薬？」

「ああ、瓶に残ってたやつ全部」

「全部！」

万作は絶句した。

「なに、大丈夫。命にかかわるほどのことじゃねえから」

「しかし」

「あいつ、ちゃんと計算して、一か八かの賭けをしようた」

倉田はうつろな眼差しを宙に迷わせる。

昨日、かれが温泉組合の会合から帰ると、静江がすわった眼でかれの帰りを待っていた。彼女はみね子が身籠ったことを知ったのである。静江は夫婦の間で子を持つことを断念していた夫が、ひそかに愛人に自分の子供を産ませるつもりでいることを知り、逆上しマンションへ押しかけていった。

静江のいうのには、みね子はただ泣くばかりだったそうだ。

静江は勝ち誇ったように、倉田へ告げた。

「子供、おろすようにいっておきました」

「なに！」

倉田は目を剥いた。

静江は憎しみと蔑みのいりまじった目で倉田を凝視した。切り捨てるようにいった。

「どうせ、あんたの子なんかじゃあるもんですか」

「馬鹿！」

倉田の拳が静江の頬をとらえた。彼女は獣のような声をあげ、足元からくず

れ落ちた。その晩、静江は睡眠薬を多量に飲み、朝方、救急車で病院へ運ばれた。

すると、やはりそうだったのか……。

万作は何日か前の雨の情景を思い出していた。

榎子の工房へ向かうバスの窓から、倉田とみね子が乗ったベンツを万作が見かけた時のことだ。関係を清算したと思っていたがその後も、二人の間はなお緊密につづいていたのである。このことを率直に倉田にいうと、かれは大きくうなづき、一週間ほど、毎日産院の前まで行っては引き返してばかりいるみね子の言い訳を聞いているうちに、彼女とこれから生まれてくる子供への情がふつふつと倉田の中へ湧き上がってきて、思わずわしの子を産んでくれとみね子へ手をあわせて押んでいたのだという。その夜かれは、みね子のふくらみはじめた下腹に頬をつけ、すまん、すまん、すまんとポロポロ涙を落としたのである。

まだ昨日のことである。倉田の赤裸々な話を聞きながら、万作は榎子の肌のぬくもりを想像していた。ふと蘇りそうな甘美な感覚を押し戻しながらも、もしあの夜、本当に榎子の手でもにぎることがあったのならと思うだけで、万作の身体を流れる血はかっとな熱を帯びてくるのだった。

静江が会いたがっているという。

倉田のベンツで、病院へ行った。

倉田を廊下に残し万作は病室へ入った。

静江はベットに起きてかれを待っていた。病人の顔色は思ったよりもずっといい。

こんなところをみせてしまつて、と静江は薄化粧した顔をふせた。そして、子供を産めない女つて劣等感のかたまりです、と自嘲した。

「少し、落ち着きましたか」

万作は<sup>いたわ</sup>労った。

「ぐっすり眠ったから、気持ちがすつと楽になりました」

「そう、それはよかった」

だれが生けたのか、窓辺のバラが紅色の花芯を開いていた。

二人はそこへ視線を移してしばらく黙っていた。

最初、あなたに主人を説得してもらおうと虫のいいことを考えてました。静江は視線を落とし、胸の内を打ち明ける。

でもいまはそんな気持ちはすっかりなくなりました、と眼差しをあげた。そしてふつきるように、非摘出子として認知するくらいならいっそのこと、と彼女はいい淀む。

「……引き取る？」

目でうなずいた。

「できますか」

「ゆるされるものなら、私たち夫婦の子として育ててみたい」

「しかし、あなたはそれでいいにしても、みねちゃんが子供を手放すかどうか」

万作は静江の身勝手を制した。

「でも、主人の子ですよ」

「それはそうです」

「十分なことはするつもりです」

静江は語調を強め、探るように言葉をたした。

「先生から、こちらの気持ちを伝えていただけないでしょうか」

万作は椅子から腰をあげた。

「今日はあなたは疲れているから、そのことはまたゆっくり聞かせて下さい」

病室を出ようとすると、万作の背を静江の小さな悲鳴のような声が打った。

「こうするよりほか、ないじゃありませんか」

ふりかえると静江の喉がひくひくふるえていた。万作は何かいいかけたがそ

の思いをぐつとのみこみ、病室を出た。

その夜、倉田と万作はかど庵の二階で酒を飲んだ。

倉田は酩酊し、もつれる足をふらふら運び、ナムマイダ、ナムマイダアと称名する。万作も朋友の後について、ぐるぐる部屋をまわる。まわればまわるほど声が高まり、足が弾んだ。

万作は酔いの向こうで一遍の声を聞いていた。

はねばはね踊らばおどれ春駒の　のりの道をばしる人ぞしる……。

榎子からは何もいってこなかった。

辛抱して連絡を待つうちに日が流れ、七月になった。

倉田夫婦は和解し、静江は退院した。

静江が万作にもちだした養子のことは、日ごとに夫婦の間でふくらみはじめていた。

先日、倉田はアパートへ顔をだし、みね子に養子のことを話したといった。すぐ結論をだす話ではないが、みね子の反応は良かったという。倉田は生まれてくる子の成人式を見るまでは何としても生きとってやらにやと自らを励まし、仁丹をせわしげに口へほうりこむのだった。

シンポジウムが一月後に迫っていた。

万作は山口と益田への小旅行のことを初めて倉田へ報告した。倉田は面白そうに聞き、村下の集落で白地を発掘するときには手伝いたいと申し出た。

三日後、槇子から封書が届いた。

事務的な連絡だけの内容だった。白地発掘の日時が七月十五日の午前十時になったから了解されたという。手紙によると、彼女はあれからもう一度、山口の銀蔵のところへ出かけ、村下の集落の杉田という総代へ銀蔵のほうから事情を伝える書状をしたためてもらった。その書状を持ち帰って杉田さんに会い、発掘について協力を依頼したところ、この日時の指定を受けたのだという。当日は杉田さんと数人の村人が発掘に立ち会い、作業の道具は正岡青年が用意するとのことであった。

万作はさっそく返信を書き、倉田と共に待ちあわせの場所に出向くことを知らせた。

そしてこの日から、万作はアパートへこもると、小説「風のごとく」の仕上げに没頭した。

銀蔵の話は、万作の行くてを阻んでいた壁を一気に取り払ったのである。かれは犬神人の一行がしだいに画面の中央へ描かれるようになるのは何故かという聖絵の最終場面の謎解きを、小説の終章に織りこむことにした。

小説では一遍の死後、予州へ渡る時衆の一団の長は銀蔵だった。銀蔵を長にすると、時衆門徒は水を得た魚のように動き出したのである。

夜陰にまぎれて予州の三津が浜に上陸した一団は、河野家の家臣の案内で、道後城下の武家屋敷へ迎えられる。かれらはそこで旅装を解き、今度は石鎚修験道者になりすまして窪野へ入り、閑室跡地を囲むように居を構えたのである。数年後、開墾した荒地へ谷川から水を引き、村下は緑豊かな集落へ生まれ変わっていた。

その年の秋、銀蔵はひとり白地に端坐していた。周囲は小黄金色の稲穂がなびく稲田である。かれは袂から取り出した絹布を広げた。右手に握った絵筆が絹布の上へおろされる。ああ、きっと銀蔵は白道図を描いているのだと万作は稲穂をかきわけ白地へ忍び寄りうとした。するとその時、遠く背後で万作を呼ぶ声がして、かれは目が覚めた。

夜通し原稿用紙に向かっていた万作は机にふせたまま寝入っていた。外でもう一度倉田の声がし、万作は腰を浮かした。

村下へ発掘に出かける朝がきていた。

林道をぬけて集落を望む丘まで行くと、見覚えのあるジープが止まって二人の到着を待っていた。

おっ、あれかと倉田が声をあげ、ジープの横手にベントをよせる。すぐ、ジープの運転席のドアが開き、正岡青年が地面へおり立った。かれはカウボーイハットに作業服である。助手席の人影がこちらに手をふった。槇子である。彼女はくったくのない表情でジープからおりてきた。

「しばらく」

万作は外に出て、近づいてきた正岡へ軽く手をあげた。

「いよいよですね」

正岡の日焼けした顔から、皓<sup>しろ</sup>い歯がこぼれる。

「お世話になります」

思わず万作が正岡の手を握ると、青年は試合に臨む選手の顔になって握り返してくるのだった。

槇子は工房で着る作業衣に身を包み、正岡の背後から万作をみつめていた。

「やあ」

と万作は声をかけた。

「いい天気になった」

「ええ」

槇子の瞳がゆれる。

「宿題の仕上げだね」

「そう、さつきから胸がドキドキして、まるで合格発表を見にいくみたい」

と槇子はおかしがってみせた。

全員がジープに乗り換え、集落に入った。

四人を出迎えたのは、白髪の老爺三人である。その中でもっともがっしりした老爺が総代の杉田だった。かれの案内で、銀蔵の屋敷の横から細い畔道をしばらく歩いた。やがて、およそ三十坪ほどの四角い土地へでた。周囲は稲田なのに、ここだけは蕎麦の葉が生い茂っている。そして石塚の立つ周りだけ丸く蕎麦が抜かれ、黒っぽい土が夏の強い日差しにさらされていた。

杉田は幼児の背たけほどの石塚を見つめながら、わしらでさえこの土地のいわれを知らなかったのだといった。それから、老爺三人は石塚に向かい経をあげた。いよいよ発掘である。

石工の正岡はさすがに手なれていた。

石塚を移動させる。盗窟された様子はない。銀蔵のいうとおりなら、土の下の石室から二河白道図がみつかるはずであった。みんなが息を殺して見守るなか、正岡は石室めがけて地面を掘り下げ始めた。

ガツ、とシャベルが鈍い音をたて、石室につき当たった。男たちが正岡を手伝い、穴の上にやぐらを組み滑車を取り付けた。穴の周囲を掘り広げ、石室の蓋のひさしの部分にロープをかける。正岡が滑車のロープを手にした。一息いれ、そして、次にぐっと引く。蓋がじわっとあがり始め、おーっというどよめきが周囲にあがった。

石室の中で、青緑色の大きな壺が生き物のように光っていた。穴に下りて、

正岡が壺を両手に抱えた。槇子がカメラのシャッターを切りつづける。

「おっ、これは重い」

正岡はちよつと持ち上げ、もう一度下におろす。

「気をつけて！」

カメラから顔を離して、槇子が声をかける。

正岡は「うっ」と一つ唸り、両腕いっぱい壺を抱え持ち、そつと地表に運びあげた。

壺は丸い肩口から胴周りがふつくらふくらみ腰がややくびれた、ずん胴に近い形をしていた。高台はなく、素朴そのものである。底に手にまわし、万作と倉田がシートの上に運んだ。壺の中で、何かぐらぐら揺れている。

「おい、水が入つとるぞ」

「うむ……」

万作は唇を噛んだ。

口縁の蓋を開けた。巻物らしき物が八分目ほどたまつた水につかっている。

万作は水の上に出た軸を持ち、巻物を水中から引きあげ、シートの上に置いた。そして朽ちかけた紐をほどくと、紙をはがすように巻物をひろげた。

しんとし、だれも声がなかった。

絵はすっかり剥落していたのである。

水でふやけ、白く濁った絹布の表を凝視し、みんなは声をのんで立ちつくしていた。

やがて万作は冷静さを取り戻し、万福寺で見た白道図を絹布の上に重ねてみた。そしてそのような目でみると、白く濁った絹布から炎と水河の二つの色たちが昇ってくるように思えた。

かれは立ちあがった。

ふと気づくと白地には多くの村人がやってきて、発掘の様子を見守っている。

万作は総代へ歩み寄った。

「壺と巻物をお借りしたい。巻物のほうは東京の大学へ送って、鑑定してもらいます」

「どうぞ、先生がやりたいようにやったらええ」

杉田は大きな手で、額の汗をぬぐった。

「シンポジウムまでに、結果がわかればええが」

と倉田が心配した。

「いや、このようにすべて銀蔵さんのいうとおりだったことだけでも、環境状況が聖絵に似ているからという北谷説なんかより、説得力ははるかにある」

と万作は自信を示した。

「川瀬先生に報告しますか」

と正岡が訊いた。すぐ倉田が断じた。

「もう聞く耳もたんやろから、ほっといたらええぞ。なあ方ちゃん、子供のよ  
うにいうていく義理はないぞ」

「うむ、わかつてる」

万作は応えた。